

第一部 現代資本主義と労働運動

3 先進国労働運動論への模索

- 1) 先進国問題の意味と性格
- 2) 先進国問題と労働運動
- 3) 先進国問題と労働者戦略

人間は何のために、いかに生きるのかという根源的な問いかけをふくめて、21世紀以後における人間の生き残りの可能性について、新しい文明モデルの提出とともに人類の共同体的存在の積極的あり方を構想し具体化していくことは、現代の労働者階級に課せられたもっとも大きな課題であろう。各国のプロレタリアートが・・・総力をあげてこの課題に取り組み、文化の構造の質的変革をふくむ人間社会全体の変革を世界的水準で実現することがなければ、この世界は、〈資本の文明化作用〉の結末としての地球の決定的な破局にむかって、しだいにその速度を早めていくことになる。

— 沖浦和光 —

1) 先進国問題の意味と性格

周知のように、最近、先進資本主義社会には環境問題、資源問題、インフレ問題、都市問題、労働疎外の問題、大学問題、人種問題、ウーマン・リブの問題など、さまざまな新しい経済的・社会的・文化的問題が噴出しつつあるが、これらの多様な「先進国問題」を一言で特徴づけるとすれば、ヨーロッパの産業革命くらい200年に及ぶ工業化ないし・産業化、より限定的に言えば20世紀型資本主義的工業化が1つのピークにのぼりつめ、もはや在来のパターンによる工業化をそのまま続けることがしだいに不可能になりつつあるという深刻な行詰りを示している、ということであろう。このことは同時に、こうした資本主義的工業化を基軸して形成され、発展してきた近代工業文明ないし人間の近代的な生活様式・生活形態そのものが深刻な危機に直面しつつあることをも意味している。

地下資源の大量消尽と人間環境の汚染を加速してきた20世紀型資本主義的工業化、なかんずく重化学工業の発展を基軸にGNP主義的経済成長を追求してきた在米パターンによる高度工業化の矛盾は、現在さまざまな形で劇的に露呈されつつあるが、当面する労働者戦略の再構成の課題との関連で言えば、とりわけ次の3つの局面に端的かつ集小的に現れている諸矛盾に着目する必要がある。

第一は、公害による人間環境の全地球的な汚染・破壊の進行と金属鉱物や化石エネルギーの大量消尽による自然資源の枯渇の危機の表面化という問題である。言い換えれば環境汚染、資制枯渇という形で現われ始めた生産力の幾何級数的発展と地球上の自然環境や資源の有限性との矛盾の激化という問題である。在米のパターンによる工業化が、一面で先進資本主義社会に物的生活手段の「豊かさ」を生みだし、先進国民衆の経済的生存のための必要を基本的に充足しつつある反面、まさにこうした資本主義的工業化の成熟 — 生産力の奇型的発展によってもたらされた「豊かさ」が、人類の生存それ自体を危機にさらす条件をつくりだすという深刻な矛盾を惹起しつつあるということである。

こうした地球破局論的な危機感は、近年さまざまな形で表面化しつつあるが、その代表的な事例は周知のように「人類の危機」の店をもつローマクラブのMITレポート『成長の限界』(2)であろう。生産と人口の幾何級数的増大と、環境、資源、食糧の有限性ととの矛盾によって今後100年以内に人類の破局が現実化することを警告したMITレポートについては、すでに本誌でも再三にわたって詳細な批判的検討が行われている(3)ので、ここで改めて内容に立ち入ることはしないが、このレポートが多くの限界と問題をふくんでいるとはいえ、体制側の提言機関の一つから無制限の経済成長を前提とする現在の社会・技術システムが維持されかぎり21世紀までに人類の破局が必至となること、つまりGNP主義的経済成長を追求し続ける資本主義的工業文明の構造転換をはからぬかぎり人類の生存の基礎が脅かされることが「人類の危機」への警告という形で告白されるに至ったことの意味はきわめて重大である。

かつて米ソによる核戦争の危機が地球破局の可能性の問題をはじめて人類の前に提起し、科学・技術や生産力が人間的制御を離れた場合の「地球」や「人類」の運命の問題を一つの極限的な形で示したが、MITレポートの問題の成熟はこれをより全国化し、より切実な問題として人類の前にクローズ・アップするに至ったのである。

第二は、都市問題の爆発的な噴出という問題である。近代における人間生活の都市化は産業革命に始まる工業化とともに進展し、すでに200年の歴史をもつが、今日、先進国にみられる都市問題は伝統的な都市問題とはその性格を一変している。すなわち、今日の都市問題の爆発は公害・環境破壊など人類の生態学的危機をもたらしつつある白資本主義的工業化の成熟そのものによって生みだされ、規定されているのであり、この結結果、各種の都市公害、都市災害、交通戦争、ゴミ戦争、自然破壊等々から高度工業化段階における人間の生活様式としての都市生活そのものの解体の危機が現実化しつつある。

この意味で、現代都市問題もまた20世紀型資本主義的工業化の破綻の所産としての性格をもっており、現代都市問題の打開は伝統的工業文明の構造転換 -- 新しい生活様式の創造 -- の課題と不可分の問題となってきた。ことに、工業化によって都市に集中・集積させられ、都市人口の大半を占めつつある労働者階級にとって、こうした都市問題の激化 -- 伝統的生活様式の危機は労働力再生産構造に至大の影響を与えつつあり、都市問題の打開は所得活動の源泉である労働生活の改善と並ぶ最大の生活問題の一つとなっている。とりわけわが国の場合は、最近来日したエーリック教授が日本国民を炭鉱のなかで有毒ガスの発生をみずからの死を以て知らせるカナリアにたとえ、都市化による過密と超開発のもたらす人類の危機を世界に知らせる先ぶれ役になっていると警告した(朝日、73年6月8日)ように、公害と都市問題では世界でもっとも“先進的”状況を呈している。

第三は、直接的生産過程、労働過程において「労働の疎外」ないし「労働の非人間化」の問題がしだいに深刻化しつつあり、このままいけばもっとも高度に工業化された産業部門を中心に資本の生成過程、労働過程を人間的解体に招きかねない状況が現われつつあることである。利潤原理による生産力向上のために経済的効率と能率向上を追い求めてきた技術革新と労働の合理化 -- その典型がフォード・システムの徹底であろう -- が、生産諸力を現実の生産力たらしめる人間＝労働力との深刻な亀裂を生じつつあるという問題である。資本主義的工業化の論理によって資本の生産力として生み育てられてきた近代技術が、人間の社会生活の土台である直接的生産過程、労働過程において生産力の担い手である人間＝労働者を人格的に破壊しつつあるという深刻な矛盾が露呈されてきているのである。

この問題が今日もっとも端的に現われているのはアメリカの自動車工業であって、たとえばゼネラル・モーターズでは労働者の無断欠勤や各種のサボタージュ、麻薬常習者の増加等によって、生産ラインが満足に動

いているのは1週間のうち3日間だけであり、“月曜と金曜にできた車は買うな”ということが常識化していると言われている(5)。アメリカ厚生省が発表した『アメリカの労働』も①無関心、②アプセンティズム(無断欠勤)、③ドラッグ(麻薬)がアメリカにおける労働の三大障害であることを認めている。言うまでもなくこれは単調で、反復的で、画一的で、無意味な労働にさいなまれた労働者たちの積極的ないし逃避的な反抗の結果である。2人の社会学者の調査によれば労働者の3分の1がその労働につよい疎外感をもっており、それはこれまで労働組合が要求してきた高賃金、労働時附の短縮、休暇の延長などでは緩和されないとの回答を見出している。スウェーデンのボルボ社でも事態は同様であった。数年前から非人間的単調労働をきらって離職者が続出し、4年前に離職率が52%に達し、欠勤率が20%をこえ、生産ラインが満足に動かなくなった(6)。これがボルボ社におけるコンベヤー作業廃止の契機になったのであるが、現在でも離職率はいぜん30%をこえている。欠勤率が20%をこえ、離職率が50%に達し、麻薬常習者が15から20%(クライスラー社のある部門では65%の労働者がヤクを用いている)というデータは、まさに資本の牙城である職場＝資本の生産過程の荒廃、資本制の人間労働の解体の危機を示して余りある数字と言わなければならない。

しかもこの問題は、単に流れ作業部門の特殊問題にとどまらず、その他の産業部門、事務部門でも労働の単調化、細分化、無意味化がしだいに一般化しており、職場における人間疎外の問題はあらゆる部門で急速に顕在化していく傾向にある。そしてこの矛盾は、労働者の所得水準の向上による経済的生活苦の緩和、余暇と教養の水準向上(学歴の向上もふくむ)による知的・精神的＝人間的欲求の顕在化につれていっそう拡大していく傾向がみられるのである。なぜなら、こうした新しい労働者世代にとって「疎外された労働」に対する欲求不満は、伝統的労働者が充たされない物質的欲求に対して抱いた不満と同じぐらい激しいものとなるからである。68年のフランス「5月革命」にみられた労働者の新しい質的要求――「参加」や「管理」への要求の基盤もまさにここにあったのである。

以上で概観した3つの局面に典型的に現われている「先進国問題」――資本主義的工業化の成熟段階における諸矛盾は、決して孤立的な現象ではなくて、相互に内的に密接に結びついて近代工業文明の新しいレベルにおける諸矛盾の基本的骨格を形づくっているのであり、その根底には生政手段からの、したがってまた生産の目的や生産物からの、さらに労働そのものからの人間の疎外という資本制生産様式の矛盾が横たわっていることは言うまでもない。

マルクーゼは、地球の生態学的危機は「資本主義的論理の純粹で端的な否定であり、資本主義の枠内で地球を救うことはできない(7)」と断じているが、こうした論断の当否はなお慎重な検討を要するとしても、MITレポートの提起した問題状況を先進国革命へのアプローチをふくむ現代の労働者戦略のなかにどのように位置づけ、どのようなオルタナティブを構築していくかという問題が、先進国労働運動の前にきびしくつきつけられていることは明らかである。たしかに、資本主義的工業化が地球と都市と人間労働を破局に導くのか、それとも地球と都市と人間労働を破局から救うために、労働者階級が資本主義的工業化をいかに制御するのか、さらに資本主義そのものをいかに“安楽死”に導くのか――今や問題はこのように提起されつつあるとも言えるのである。

しかし、このことは資本主義の枠内ではいかなる改革も無意味・不可能であるとか、社会主義になればこれらすべての問題が容易に解決するといった安易な問題設定を許さない性質の問題であることも明らかであろう。なぜならこうした資本主義的工業文明の危機はグローバルな性格をもっており、また既成の社会主義的業化は今のところ結局、資本主義的工業化の一つのヴァリエーションにすぎず、部分的にはこうした破局モデルを実質的に模倣し、後追いしているにすぎない面がみられるからである。ソ連社会主義がフルシチョ

フ時代のみならずブレジネフ時代においてもなお、アメリカの工業生産に追いつき追いこすことを至上の課題とし、このために先進資本主義国の生産技術の導入・模倣をはかっていることは周知の事実なのである。従来のジェット機をはるかに上回る大量の酸素を消費し、成層圏に有毒排気ガスをまき放らして飛翔する恐怖の「怪鳥」SSTの開発 -- アメリカでは大気汚染や騒音公害に抵抗する市民運動の圧力もあって71年に開発が中止された -- において、ソ連が英仏のコンコルドと競争していることも、単なるエピソードとみることはできない。

この意味で、近代工業文明の構造転換の課題は既成社会主義においても未解決のままにおかれている未踏の課題なのであり、先進資本主義国の労働者階級が担うべき歴史的課題となりつつある、と言えるのである。

2) 先進国問題と労働運動

ところで、近代的労働組合運動はまさにこうした資本主義的工業化の申し子であり、工業化の急激な進展＝産業の近代化とともにその組織と運動を発展させてきたことは周知の通りである。したがって、現在、工業化ないし産業化自体が一つの行詰りに逢着し、在来のパターンによる工業化 -- 生産力の奇型的発展そのものの転換が深刻に問われているということは、とりもなおさずそれと表裏の関係におかれてきた労働組合の在来のパターンによる運動もまた深刻に問われつつあることを意味しており、さらにこうした労働者階級の運動と闘争を基盤にして形成され、発展してきた伝統的社会主義運動もまた大きな転換をよぎなくされていることを示している。

なぜなら、従来の組合運動は経済成長や生産力発展の性格や方向に対してイデオロギー的にはしばしば批判的ないし懐疑的立場を表明してきたとはいえ、実践的には概ねこれに対して中立の立場をとるか、あるいは事実上積極的に肯定的立場をとりつつもっぱらその成果配分において有利な地歩を占めることに運動上の中心眼目をおいてきていたからである。とくに現代資本主義がケインズ政策によって持続的経済成長に成功するにつれて、この傾向は先進国労働組合にふかく固着してきていた。そしてそれは、経済的生存の確保が労働者階級の最大関心事であった工業化の成熟以前の段階に照応する労働組合の自然的機能だったのであり、それゆえにまた固有の伝統的機能として体質化されてきたのである。労働者の経済的地位の改善をめざして分配面で資本と相争うためにも、経済成長と生産力発展はそのための不可欠の前提として-暗黙にせよ、明示的にせよ -- 積極的に措定されてきていた。

しかし今や在来のパターンによる経済成長や生産力発展が労働者の生活向上にとってこのような意味での無条件的な前提ではなくなってきた。有利な分配のための前提条件と考えられてきた経済成長や生産力発展が地球の破局や都市問題の爆発、人間労働の解体の危険をもたらしつつあるからであり、分配面で有利な地歩を占めることのみによっては解決しえないのみならず、かえって事態の悪化を加速しかねない多くのより深刻な問題を噴出させはじめてきたからである。

このことは、社会主義運動に対しても困難な問題を提起する。創始者たちの深遠な理想にもかかわらず、伝統的社会主義運動はさし当り資本主義の生産関係を変革し、生産力を生産関係の桎梏から解放することによって生産力をよりいっそう発展させ、より豊かな物質生活を勤労者に保障しうる社会体制を創ることを主要な運動目標の一つとしてきていた。こうした運動目標は、労働者階級の基本的必要を充たすための生産力を確保するためにも資本主義的生産関係を突破することが不可避であった蓄積期の初期資本主義の時代においてはそれなりの普遍性をもっていた。ロシア革命はまさにこのような飢餓と窮乏が革命の基本的原動力で

あった時代に適応した形で資本主義的生産関係の社会主義的突破をなしとげたのであった。しかし「蓄積の時代を終えて、蓄積からの解放の時代に入った」先進資本主義社会においては、このようなビジョンはもはや社会主義の目標に勤労者を動員 する上で有効なものではなくなっている。先進諸国においては「人々の暮らしを保障するために必要な社会の物質的基盤、財や機械の生産は社会の主要努力に占める割合において後退し」てきており、今や少くとも先進国民衆にとっては「財の生成が社会組織の中心目標でも決定的要因でもある必裂はなく(なっている)・・・つまり(経済的)生存への闘いが人々の第一の任務である必要はもはやなく」(9)なってきたのである。こうして先進資本主義社会においては、労働運動の成果とも相まって「福祉の絶対的水準が高まって、絶対的な飢えを原動力とする政治運動を問題外にしてしまった(10)」という状況が50年代末から60年代にかけてしだいに定着してきていたのである。

つまり、先進国労働運動においては、労働者の要求が経済的生存のための闘争という領域から脱け出て、生存の質 -- 生存の意味や目的や条件といった価値の領域に拡大し、移行することによって、先進国革命における文化革命的性格がすどくクローズ・アップされるようになってきていた。アメリカのニュー・レフトの一人、カール・E・クレアの説くように「およそ全面的な(人間)解放が起りうるのは、社会がその第一の関心物である物質的な生存への闘いを克服しうるだけの諸資源を蓄積した時だけ(11)」なのであり、「蓄積からの解放の時代におけるアメリカ資本主義の潜勢力と矛盾は、全面的な、文化的な革命を、将来における社会革命の、可能で、かつ必然的なあり方とするようになった」(12)とする問題意識が先進国“非主流”左翼とくに“構造改革派”をふくむニュー・レフトの間に急速に拡大してきていたのである。

しかし同時に、現在ではこうした経済的生存のための闘いの必要の緩和ないしそれからの解放によって生ずる現代先進国革命の新しい性格を説くだけでは不十分であろう。なぜなら、すでにみえてきたように先進国民衆の経済的生存の問題を基本的解決に導いてきた経済成長と生産力発展(蓄積の時代の終焉)そのものによって、いまなお飢餓にあえぐ南の世界の民衆をふくむ人類の生態学的危機の問題が急速に成熟してきているからである。「資本主義が稀少性を克服したと説く人々に対しては、ゴルツはこう主張する。資本主義は稀少性を絶滅するどころか、新しい水準において稀少性を再生産していると。それは、たとえば(自由な)時間の稀少性であり、原料やエネルギーの稀少性であり、さらに、新鮮な空気や緑の草や人々が待ちこがれる平和と静寂という稀少性ですらある。こうした稀少性の存在と再生産こそが、実は資本主義がくり返し生み出す疎外の源なのである。資本主義は、その疎外を再生産しかつ利用することを通じ、人間の欲求をそらし、その行動を物象化することによって、支配を永続化させている(13)」のである。

こうして今日、社会主義運動は第二次大戦後の二つの試練 -- スターリン批判による既成社会主義の権威の失敗、「豊かな社会」による窮乏革命論の破綻 -- について第3の試練 -- 新しいレベルの稀少性=地球破局の危機に対して社会主義はいかなるオルタナティブを構築しうるのか、というきびしい試練にさらされているのである。

マルクス主義もふくめてこれまでの社会科学は地球の無限性という公理を前提として -- 少くともこれを直接の問題外において -- さまざまな緻密な定理を組み立ててきたが、今やこの公理そのものが動揺しつつあるのである。従来の革命理論もまたいわばこの定理の次元における問題であったとすれば、公理の動揺によってその再編を迫られるのは当然のことであろう。したがって「人類の〈生き残り〉と文明モデルの転換をめぐる提案が、資本の側から積極的に出されて、労働の側はそれらの問題意識のたんなる受け手にとどまっている、いや問題の意味するものさえもまだ明確に把握されていないという現状(14)」が根本的に打開され

ないかぎり、社会主義は戦後第3の試練を突破することができず、社会主義の現代的生命力を真に回復することも不可能であろう。

3) 先進国問題と労働者戦略

こうした資本主義的工業化・産業化のもたらしつつある詩矛盾を前にして、ここ数年、資本ないし体制側からいくつかの新しい対応への模索が現われてきていることはすでに若干ふれたが、新しい労働者戦略の胎動の検討に入る前にこれについてももう少しみておくことにしよう。

まず、第一の地球破局的問題状況への対応としてはすでにふれたローマ・クラブの報告をはじめ、イギリス『エコロジスト』誌の「生き残りのための青写真」、元EC委員長マンスホルトの提言「ゼロ成長の世界」などが人類の生態学的危機へのさまざまな管告と提言を行なっている。こうしたなかでテクノロジー・アセスメントや環境アセスメントといった考え方や手法が開発され、アメリカではこれらがすでに立法化されている。わが国でも去る3月産業計画懇談会が発表した『産業構造の改革』(15)に関する提言の背景には、公害問削をめぐる国民の反企業感情に対する危機感とともにこうした問題意識がある程度反映されていると考えられるが、基本的には天然資似の供給制限への対応が模索されているにすぎない。

第二の都市問題については、アメリカの巨大都市ことにニューヨークなどにおける都市生活の解体傾向と野蠻化に対する市民的抵抗の圧力におされてさまざまな対症療法が施されつつある。とくに世界人口の6%で世界のエネルギーの3分の1を消費しているアメリカでは大気汚染を中心とする都市環境の問題が深刻化しており、このため国家環境政策法(70年)やテクノロジー・アセスメント法(72年)などの制定によって環境保全にのりだすとともに、マスキー法や大都市でのマイカー規制などクルマ文明への批判がしだいに高まってきている。また、日本の都市問題の爆発が公害問題と並んで世界の注目をあびていることはすでにふれたが、これらの問題で日本が世界の“超先進国”となっていることは周知の通りである。しかしわが国の場合、田中内閣の「日本列島改造論」にもみられるようにいぜん環境破壊型の超高度成長のビジョンを変えておらず、体制側には従来の経済成長への反省や現代都市問題への基本認識がおどろくほど欠如している。先にふれた産計懇の提言にも「公害同組はいささか騒ぎ過ぎの嫌あり・・・」とか「(公害を)人が気がつかない程度まで排除することは決してむずかしいことではない。だから公害問題について徒らに喧伝し、神経質になる必要は全くない」といった粗雑な問題意識が貫かれている。わが国の場合、こうした問題の打開を真剣に模索しつつあるのは体制側というよりむしろ市民運動であり、こうした市民的エネルギーをバックとする革新自治体であるところに一つの重要な特色がみられる。

第三の労働疎外の問題については、EC委員会が本年4月に「社会・労働政策白書」を発表し、そのなかで加盟国が優先して着手すべき統一労働政策としてコンベヤーによる流れ作業方式の全廃を提案しているのが注目される。言うまでもなくこれは前述のゼネラル・モーターズの職場マヒ -- 労働者の積極的反抗としてはとくに〈ローズ・タウンの反乱〉やアメリカ自動車産業史上最長記録となたノーウッド工場の長期ストなどが有名である -- やボルボ社における同様の事態による職場の解体化現象-フォード・システムの危機 -- などに対する一つの対応として現れてきたものであることは明らかである。

以上のように、資本主義的工業文明の危機に対する体制の新しい対応も全体としてはまだ問題体系の模索と対応療法の域にとどまっており、とどまらざるをえない体制上の限界をもっているのであるが、本来、体制の変革もふくめてこうした問題によりラディカルに取り組むうはずの労働側の対応が、全体としてはまだ

体制側の問題意識よりさらに立遅れている -- 公害・都市問題においては労働運動以上に市民運動がより多くの運動実績を示している -- ところに、今日の先進国労働運動とくにわが国労働運動の混迷の根因の一つがあると言えるであろう(17)。

しかし、近年ヨーロッパ労働運動を中心にこうした問題状況へのアプローチをふくむ先進国労働運動の新しい戦略に関する模索と再構築への努力が急速に本格化しつつあることも見逃しえない事実である。以下、これらの動きを概観しつつ、現代における先進国労働者戦略の新しい方向の基本点について検討してみることにしよう。

まず、71年9月にローマのグラムシ研究所の主催により、CGIL(イタリア労働総同盟)なども積極的に参加し「人間・自然・社会」をテーマに注目すべきシンポジウムが行われたが、副題の「エコロジーと経済的・社会的諸関係」、が示しているようにこのシンポジウムは現代エコロジーが提起しつつある諸問題に対する労働運動の立場からのアプローチの方向が探求された。すなわち①エコロジーとマルクス主義、②技術進歩、人口増加、資源とエコロジー、③労働者階級とエコロジーを3本の柱に労働運動・社会主義運動が当面する生態学的諸問題に対する哲学的・自然科学的・実践論的アプローチが行われ、生態学的な人間社会の危機に対するマルクス主義ないし労働運動の立遅れについて多面的にメスが加えられており(18)、このシンポジウムの成果はイタリア労働運動の今後に大きな影響を与えていくものと考えられる。ついで注目されるのは、IGメタル(西ドイツ金属労組)が主催し、72年4月に、世界の労組指導者をはじめ、ハイネマン西独大統領やパルメ・スウェーデン首相らをふくむ政治家、アンドレ・ゴルツ、ケン・コーツらヨーロッパ・ニューレフトの論客をふくむ学者、技術者、官吏など1,000余名の多彩な参加者を集めて開かれた第4回国際会議である。今回のテーマは「未来への挑戦 -- 生活の質の向上を求めて」であり、「生活の質Quality of Lifeとは何か」を総論に、未来社会の形成における労働組合の役割が多面的に検討された。すなわち教育、運輸・交通、環境、健康、地域開発、民主主義などの「質」が「生活の質的向上」の課題との関連で究明され、生活の質的変革をめざす未来社会の形成のための諸条件とそのなかで果たすべき労働組合の役割について広汎な問題提起と討論が行われた。一国の1産業別組織(IGメタルの組合員は150万)がこれだけ壮大な規模、深遠な目的、多彩な参加者を擁する国際会議を開きえたこと自体が一つの驚異であるが、同時にここにヨーロッパ労働組合運動の新たな問題意識の所在、したがってまたその現代的活力の一端を感じさせるものがある。注目すべき主要報告のいくつかは『月刊労働問題』誌に連載紹介されたが、オットー・ブレナー会長(会議後病没)が閉会に当って送ったメッセージのなかで述べていたように「生きることだけが問題なのではなく、いかに生きるか、どのような条件の下で生きるかが問題である。・・・われわれの目的はなにがあろうとも不変不動である。それは物質的・精神的搾取から解放された、平和と国際連帯と社会的平等の基礎の上に立つ、すべての人間が社会生活に完全に民主的に参加できる国際社会の建設である」(20)との問題意識の下に、先進国労働運動のニュー・フロンティアを探求しようとしたこのシンポジウムの成果は、今後の世界の労働運動、とくにヨーロッパ労働運動に対して長期にわたってふかい影響を与えていくであろう。

以上2つの注目すべきシンポジウムは、ヨーロッパ労働運動が「蓄積からの解放」と「新しいレベルの稀少性」の共存の時代 -- 生活の新しい価値への欲求と人類の生態学的危機が共存しつつある時代の諸課題に挑戦する労働者戦略のニュー・フロンティアの模索と構築に真剣に取り組みはじめたことを示す代表的な事例であるが、こうした動きのなかを示されているヨーロッパ労働運動の新しい動向のなかでとくに下記の2点に注目する必要がある。

第一は、伝統的労働組合主義 -- 労働組合を労働力の独占販売組織として位置づけ、労働力の価格引き上げを最大の機能とする -- の本家本元とみなされてきた自由労連系のヨーロッパ労働組合の主力部隊が新しい労働者戦略の模索のなかで伝統的労働組合主義からの転換に本格的に取り組みはじめているという事実であろう。IGメタルのシンポジウムはその典型であるが、昨年7月の国際自由労連大会が同じく「未来への挑戦」を主要議題とし、現代における労働組合権、産業上・経済上の民主主義、環境問題、多国籍企業問題の4つを主要な討論の柱に選んだこと、ことに経済的民主主義の問題が企業、産業、国民経済への労働組合の発言権の強化の要求のみならず、EC 機構への労組の参加、多国籍企業の国際活動の制御のための国際経済憲章や国際税創設の構想までもふくめて大きな論議を呼んだこと、環境問題でベルギー労働総同盟のデブン書記長が「今日、世界の当面するこの問題は先進国の行きすぎた開発と、第三世界の遅れすぎた開発である。資本主義国ではおしなべて行きすぎた出発が行われているが、・・・これは単に政策の欠陥ではなくて本質的な問題であり、現在の資本主義体制のなかでは解決困難な問題である。・・・公害を伴う急速な経済成長は先進国の環境を破壊すると同時に、他方では後進国の資源を急速に収奪している。これを克服することなしには先進国の環境問題も後進国の開発問題も解決しない。しかも先進国の開発を抑えることは、低開発国の開発をさまたげることであってはならない」(21)とのべたことなども、ヨーロッパ労働運動の新しい動向を示唆している。

第二は、こうした労働者戦略のニュー・フロンティアの模索のなかで労働、技術、生産、価格、企業、産業等、労働と経済に対する労働者による制御の要求が顕在化してきていることである。自由労連大会における経済民主主義をめぐる論議にも現われていたように、ヨーロッパ労働運動には全般的に経済民主主義の思想と運動理念の高揚がみられ、その具体化のために労働者統制（ワーカーズ・コントロール）の運動の強化が多様な形で追求されようとしている。DGB（ドイツ労働総同盟）における共同決定権の拡大・強化の要求、フランス労働運動における自主管理（オートジェスチョン）の要求、イタリアにおける工場評議会、イギリスにおける労働者管理（ワーカーズコントロール）の運動など、運動の形態や名称、要求の強弱、問題意識の深淺などはきわめて多様であるが、これらはいずれも程度の差はあれ、企業や産業における資本の専制的支配に対して労働者の直接的・対抗的参加を要求し、企業や産業に対する制御のための“労働者権力”を樹立・行使しようとする共通の問題意識が横たわっているとみられる。

今春のフランス総選挙の際の社共による共同政府綱領においても、フランス・ブルジョアジーとドゴール党をもっともおびやかした問題の一つは共同綱領の中心点の一つであった経済部門の改革綱領ことに企業管理と国有化の拡大の部分であった。そして企業の労働者管理をいかなる方式で実現するかが社共両党の主張な論争点の一つとなっていた。「労働者の自主管理を要求する社会党と、国家の介入を主張する共産党との間に論争があって解決し」なかったのである(22)。「68年〈5月革命〉以降とくに一般につよい影響をあたえている自主管理の思想については、CFDT（民主労働組合）や社会党においても自主管理的社会主義を主張するに到っている」のに対し、共産党や、CGT（フランス労働総同盟）はこれに批判的ないし懐疑的立場をとっている(23)。いずれにせよ、めざさるべき先進国社会主義像との関連もふくめて、これがヨーロッパにおする当-印する労働者戦略上の主張な論点の一つになってきていることは明らかである。

これとはやや角度を異にするが、最近結成の運びとなった欧州労連(当面自由労連系だけで結成)の最大の運動目標の一つもECの意志決定過程とくに経済・社会政策の決定過程に対して欧州労組が結束して参加を製求し、労働組合の影響力を行使しようとするところにあるとみられる。とくにDGB（ドイツ労働総同盟）は国内

において共同決定権の拡大を要求するとともに、国内の多国籍企業はもとより、EC レベルのすべての機関、すべての企業における共同決定権の実現を指向しつつある。

もちろん、こうした「参加」問題の反面には資本による労働組合の統合の意図が強力に働いていることも否定できない。したがって日本の一部の組合で考えられているような労使会議的なもの、つまり企業や産業における労使共同体の形成 -- たとえば生産調整について労資が談合したり、公害に対する市民の抵抗を企業にかわって慰撫する役割を組合が担うといった「参加」もあるであろうが、それはこうしたヨーロッパ運動の新しい傾向とはまったく異質のものであろう。

去る5月、ハーグで「テクノロジー・アセスメント国際会議」が開かれたが「技術開発に当って、その技術のもつ社会環境に対する効果を評価することによって、目標を達するのに社会全体からみて最も適切な技術の方向を決める手続き」(大島恵一京大教授)とされるこの手法も、この会議でも大きな論点になったように(24)「だれが、どんな組織が、いかなる側価値体系によって評価するのか」が決定的な問題の一つであることは明らかであり、ここにも労働組合の積極的な介入の領域があり、環境アセスメントについても同様のことが言えるであろう。とくに労働者にとっては職場レベルでのテクノロジー・アセスメント、環境アセスメントが決定的課題の一つであることは言うまでもない。

こうした労働者統制(管理)の思惑は、資本との有利な賃金交渉という伝統的労働組合機能をこえて、資本による生産過程の専制的支配に挑戦し、労働の疎外、資本主義的分業と労働の細分化、単調労働などと闘っていくことを意味していると同時に、現代民主主義の根本的革新 -- 生産点における労働者の直接的・対抗的参加を実現し、労働者自身による生成力の管理と制御を指向するものであり、さらにそのことによって単なる労働苦からの解放をこえて、労働における人間解放 -- 資本主義的労働倫理や労働観の否定、娯楽、遊び、レジャー、消費と統一された「意味のある、豊かな、充実した労働の創造」(カール・E・クレア)への志向、すなわち人間の自己表現としての労働への変革といった現代労働運動の根本的諸課題をふくむものである。

生産力は単に無制限に“物をつくり出す力”としてのみ理解されるべきではない。生産力は労働生活や都市生活をより人間化し、社会福祉を抜本的に改革し、民主主義を真に開花させ、第三世界の飢餓と窮乏を克服し、人間の新しい生活様式を創造していくための強力な手段 -- 近代工業文明の構造転換のための手段ともなりうる“人類の力”でもある。しかしこの可能性は、新しい生活の質を求める広汎な市民的エネルギーと結合した労働運動による生産力の人間的・社会的制御の前進によってのみ、はじめて現実化する。

それゆえにまた、こうした課題は労働組合では果すことができず、労働者評議会運動の創設が不可欠だとする有力な議論が存在する。そこには濃淡の差はあれ、伝統的労働組合の体質転換に対する一定の“絶望”が前提されているように思われる。しかし、労働者階級の生活構造や意識構造、労働組合運動をめぐる情勢や課題が根本的な構造変動をとげつつある時代に、伝統的労働組合の体質や機能を静態的にとらえる必要はないであろう。もちろん労働組合が労働運動の当面する新たな、複雑な諸課題をすべてなしとげうるわけではないから、さまざまな運動組織が問題そのものの“現場”に多様に輩出することはさげられないし、むしろ促進されるべきであるが、評議会運動のみに労働運動革新の過大な期待をかけることはかえって非現実的であり、両者の弁証法的構造こそが探求されるべきであろう。

こうして、労働者生活の防衛と向上を主目標にしてとする労働組合は、単に有利な分配のための闘争 -- の課題はいぜん重要であるが、これさえも在来パターンを転換する必要に迫られている -- をこえて、生産における人間疎外にメスを加え、労働における人間復権のために闘うのみならず、都市問題を中心とする社会

的生活環境の人間化のために、さらに南北問題の打開や地球的な環境汚染と資源蕩尽による地球破局の危機に挑戦していくためにも、近代工業文明の構造転換と人間の新しい生所様式の創造 -- 生活の質の変革 -- をめざして、みずからのヘゲモニーによる多様な運動意識や運動形態を駆使しつつ経済成長と生産力発展そのものの管理とコントロールに向って前進せざるをえなくなっているのであり、ヨーロッパ労働運動を中心にかこうした問題意識への目覚めとそのため新しい労働者戦略の実践的模索がようやく国際的に本格化しつつあるのが、現段階における先進国労働運動の姿である。それは客観的条件の変化によって促迫されているのみならず、「蓄積の時代」から解放された“豊かな社会”のなかで新しい質的な要求 -- 知的・精神的= 人間的欲求を熾烈化し、「管理要求」を顕在させつつある先進国プロレタリアートの新しいレベルでの成熟という主体的条件によってもつよく促迫されているのである。

この歩みはいまだ遅々としているが、人類の未来がかこうした先進国労働者階級による労働者戦略のニュー・フロンティアのダイナミックな構築とその実現に大きく依存していることは、いぜんとして一つの「公理」であるだろう。

- (1) 沖浦和光「〈自然-人間〉系と文明」『現代の理論』、1972年12月号、38～9頁。
- (2) D・H・メドウズ他『成長の限界』、ダイヤモンド社、1972年。
- (3) 長洲一二「“地球政局論”と地球改造」『現代の理論』、1972年8月号。後藤、正村、中岡、沖浦、長洲
「地球破局論と新しい文明モデル」、72年12月号。磯和男「〈地球破局論と新しい文明モデル〉批判」
同、7
3年2月号。
- (4) 松下圭一『都市政策を考える』岩波新書、1970年、参照。
- (5) アメリカ自動車工業の諸事実については、初岡昌一郎「月、金曜日製の車は買わない」『月刊労働問題』、
日本評論社、73年6月号による。
- (6) 『読売新聞』1973年5月15日。
- (7) 『エコノミスト』毎日新聞社、1972年8月1日号。
- (8) カール・E・クレア「日常生活の批判、ニューレフト、知られざるマルクス主義」『レーニン以後のヨーロッパ
・マルクス主義(上)』、現代の理論社、1973年、38頁
- (9) カール・E・クレア、前掲書、39頁。
- (10) E・P・トムソン「頽廢の地点に立って」『新しい左翼』、岩波書店、1963年7頁
- (11) カール・E・クレア、前掲書、36頁。
- (12) カール・E・クレア、前掲書、40頁。
- (13) ディック・ハワード「セルジュ・マレとアンドレ・ゴルツ」『レーニン以後のヨーロッパ・マルクス主義「下」』
現代の理論社、1973年、304頁。
- (14) 沖浦和光、前掲論文、38頁。
- (15) 産業計画懇談会『産業構造の改革』大成出版社、1973年、8頁。

- (16) 『読売新聞』 1973年5月15日。
- (17) 久保孝雄「労働運動と市民運動」『岩波前座・現代都市政策』II、岩波書店、1973年、参照。
- (18) 片桐薫訳、『マルクス主義における人間、自然、社会』現代の理論社、1974年。
- (19) 前島巖「壮大な規模、意欲的な試み」『月刊労働問題』日本評論社、1972年12月号、
- (20) 前島巖、前掲論文、50頁。
- (21) 初岡昌一郎「西欧労働運動の新しい動向」『労働調査』、労働調査協議会、1972年9月号、
- (22) 藤村信「左展開するフランス」『世界』岩波書店、1973年5月号、86頁。
- (23) 海原峻、同誌、94頁。
- (24) 『朝日新聞』 1973年6月5日。